

第2回

もっと話したくなる関係性へ
～子どもを真ん中に、心をつなぐコミュニケーション～

講師 松原 美里 氏

1 日頃のコミュニケーション

まず、皆さんは年齢層も立ち位置も、過去の経験も様々だと思います。育った地域も様々です。もはや日本語を使っていることだけが共通しているのかもしれませんが。同じ言葉を使っていると相手に伝わっている気になります。しかし、意外と違うことを考えているということ、何を大事にしていいたら、本当に同じ景色を見ることができるかということについて、大事なポイントを見つけていきましょう。

(1) 事前アンケートより

いろいろな生き方の中で、それぞれ人は、「普通、当たり前」という意識をもっています。しかし、それらは人それぞれ違うのです。だからこそ、お互いの違いをどうやって活かし合っていくかということを、皆さんのアンケートと共に振り返っていききたいと思います。

アンケートから、皆さんが日々声を掛け合ってコミュニケーションを心掛けている様子がわかりました。ただ、大事なことから伝えたいけれど、相手が傷ついてしまうかな…と思うと、言葉を選びすぎてうまく伝えられないこともあります。特に新人の先生は、本当はもっと情報共有や連携をして、いろいろと教えて欲しいと思っているかもしれないです。一方で、ベテランの先生は、ここまで言わなくてもいいのかな、あまり言いすぎると嫌な気持ちになってしまうかなと遠慮しているかもしれません。中堅の先生は、上司や後輩の板挟みであったり、なんとか繋ぎになりたいと悩んだりすること

もあるかもしれません。

多様な立場や背景があるので、同じ日本語を使っている、うまく伝わらないというのはもどかしさを感じます。核心を伝えようと、いろいろと言葉を尽くしても「真ん中」が伝わらず、「そう受けとられてしまった。」「そうではない。」と思ってしまうことがしばしばあります。

もしかすると、当たり前だからここまで言わなくてもいいと思っている「暗黙の了解」が、人によって違うかもしれません。見ている正解は人それぞれで、言わないとわからないというところが意外と大事なのです。例えば、今日この場にいても、皆さんから見える景色、感じていることはそれぞれ違います。同じ話を聞いても気になるところはみんな違うはず。違うのが当たり前なのです。違うからこそ違いを受け入れて、一緒に作っていくというコミュニケーションが大切かもしれません。

以前、フランスの新幹線に乗りました。フランスでは、乗客がずっと大きな声で話をしていました。フランスに暮らしているだけで、アフリカ系フランス人、クロアチア系フランス人、ずっとフランスにいた人、イギリス系フランス人、混血の方がたくさんいて、文化の背景も愛着のあることも価値も違います。違うからこそ、対話をしてすり合わせて、「真ん中」を見つけていく努力をしていたということに気が付きました。一緒に作っていくのだと思ってみると、違った景色が見えるかもしれません。

ここまでの話の中で、感じたことを書いてい

きましょう。私達人間は感じる事が一番大事です。

次に隣の人に伝えてみましょう。自分が感じたこと、心が動いたことに言葉を与えていきます。書いたことで気づいたこともあると思います。言葉に自分の声をのせて話してみると、自分が自分の声をキャッチして、考えがますます深まっていくということがあります。人に考えを伝える、相手の考えを聴くという機会は、新しいものを入れて循環させていけるような大切な時間となります。

(2) 公園にて

～頭に思い浮かんだ情景を絵で描きましょう～

ある景色をいくつかお話ししますので、頭に思いついたまま、描いてみましょう。

①公園があります。②子ども達がお散歩に出かけました。③道すがら、季節の花が咲いていました。④カモの親子が歩いていました。⑤古民家に到着し、子ども達は遊びはじめました。⑥地域の人にご挨拶をして、帰ってきました。

皆さんの頭の中に、どんな景色が浮かんだでしょうか。同じ言葉を聞いたはずなのに、自分の絵と隣の人の絵は違ったものになっています。言葉からイメージすること、どう解釈するかは人によって違うのです。

(3) お互いの違いを埋めていくための工夫

絵を描くうえで、どんな情報があったらわかりやすかったですか。伝えておいて欲しかったこと、当たり前すぎて言っていなかった前提はありましたか。保育の中でも、このような事が起きていませんか。「言いましたよね。」「伝えましたよね。」「これはどういうこと?」「聞いていたけれど、そういうことだとは思いませんでした。」というような出来事はありますか。

私は、質問は受け付けられないという雰囲気を

作っていましたが、質問できたとしたら聞きたかったことがあると思います。知りたいことを聞かなければ「聞かれていない。」「聞いていない。」「当たり前でしょ。」となります。しかし、お互いの当たり前が違いましたよね。

2 子どもへの思いに耳を傾ける

(1) お互いの意図・前提を理解し合うために

多様性を尊重し合える柔軟な組織へ

現場には、男性も女性もいて、新人さんでフレッシュな感性の方や、だんだん周囲が見えてくる中堅さん、長いこと一緒にやっている方もいれば、20代から70代の方がいらっしやって、見てきた世界が違います。生え抜きで自分の園のやり方には詳しいけれど、他の園のやり方は知らないのも、自園のやり方が常識だと思っている人もいるかもしれません。一方で他園の経験がある方は、園によって違う部分を確認しておこうとする中で、疑問が浮かんでくるかもしれません。また、保育の道だけでやってきた人と、他業種を経験した人では、保育の暗黙の了解が違います。保育への思いにも違いもあるはずです。温度差があっても、経験、形態が違って、見ている世界を重ね合わせていくことで、見えることが広がってくるかもしれません。では、立ち位置が違っていて、お互いを知り合うには、どうしたらいいでしょう。

(2) 共通点は〇〇〇のために

私達には「子ども」のためにという共通点があります。あなたは子ども達に、どんな大人になって欲しいと思っていますか。こんな大人になって欲しいから、こんな体験や経験をさせてあげたいという思いがあると思います。それは、どのような背景から来ていますか。

私は、子どもの考えていることや、思ったこ

とを聞いてみたいと思っています。なぜかと言うと、私の父はいつも私に「どう思う？」と聞いてくれたからです。「私はこう思うし、これがやりたい。」と伝えると「わかるよ。」「今回はこうしないけど、これはありだと思うよ。」と言ってくれました。自分の話を聞いてもらったことで、いろいろなところで自分の考えを伝えやすくなりました。皆さんは、子どもにどんな大人になって欲しいですか。どんな思いや背景がありますか。

(3) 私達の言葉の背景にあるもの

お互いに、子どもへの思いやその背景を聴き合いましょう。保育の現場に立つ同じ立場同士で、「子どものために」という思いを聞くと、最初「分かる!」と感じたと思います。話を最後まで聞くと、最初感じたイメージ通りだったのでしょうか。良い意味で違うドラマが見えてきたのではないのでしょうか。その方の人生が立ち上がってきて、それによって、愛しさが込み上げてくる場面もあったかもしれません。人は魅力的な存在です。皆さんの職場仲間も、生まれ育ってくるまでの体験や、出会ってきた人によって、与えられてきた言葉は違うはずです。「頑張れ!」という言葉が、嬉しい人もいれば、プレッシャーになる人もいるかもしれません。ものごとの意味づけは、その人によって違うのです。

「自分とは。他者とは。」どんな人なのか、どんな存在なのか、その人によって違います。以前、保育士はみんな子どもが好きだと思って、自園の職員に聞いてみたことがありました。「私は、他になれることがないから、人に言われて保育士になりました。」「今は、子どもが嫌いではありません。でも、保育がうまくできません。」と言っていました。好きなのに、できない自分に葛藤していたのだと気づきま

した。

子どもの世界はとても奥深くて、一人一人の生い立ちや、いろいろな事を一緒に分かち合っていく仕事なのに、仲間同士でどんな思いをもっているのかをじっくり聞ける機会があまりありません。ですので、相手の言葉の奥にある思いや願いに、耳を傾けていきませんか。日常の中にも、大切なことは言葉の奥にあります。

3 大切なことを話せる関係性のために

実は私達は、相手によって関係性を決めています。知らない人にいきなり打ち明け話はしません。顔見知りの人、散歩ですれ違う人に会釈はするかもしれませんが、突然「私、悩んでいるんです。」とは言わないと思います。では、「おはようございます。」と挨拶してくれる人は、どうでしょうか。

もう一步踏み込んで、相手の近くに行けるとしたらどうでしょう。もう一步踏み込む、心の距離を埋めていくことです。それは「挨拶+ α の“雑談できる関係性”」から始まります。雑談からはその人の価値観が見えてきます。雑談は、言葉の奥にある心が近づいて、打ち明けられる関係性をノックするようなコミュニケーションと言えるかもしれません。

<日々の雑談から、お互いの世界観を見る>

- ・木 気候や天気の話
- ・戸 道楽（趣味）の話
- ・に ニュースの話
- ・立 旅の話
- ・て 天気の話
- ・か 家族の話
- ・け 健康の話
- ・し 仕事の話
- ・衣 ファッションの話

- ・食 食べ物の話
- ・住 住まいの話

話の奥に、その人が何にどう感じているのかが見えてきます。職場の仲間と話すとしたら、どんな話をしますか。大事な子ども達を見る仲間だからこそ、いろいろな切り口から、お互いを知り合うということをしませんか。一つの答えだけではなく、さまざまな視点から物事を捉えていくことを、球体思考といいます。いいこと、そうでないことが、人にも人生にも仕事にもあります。いろいろな人がいるから、子どもや家庭を支え合えます。仕事には様々な側面があって、一緒に深めていくことができます。多面的に一緒に見て、育ち合っていける仲間になれるといいですね。

4 未来を共に創る思考回路

～ポイントはWEで考えること～

概念をお伝えします。例えば、私が何かしようとする、Aさんから厳しい言葉を頂くときがあるとします。何をやろうとしてもAさんはいつも私を否定する。厳しい、価値観が合わない気がする。一緒に仕事するのが嫌だと思ふことがあるかもしれません。

こう聞くと、やり方がぶつかるかもしれませんが、視点を「理想の状態」に引き上げるとどうでしょう。先ほど、子どもへの思いを相手から聞いたときに、「なるほど、そうだったんですね。」「それは、大事ですね。」と思えたと思います。この「理想の状態」とは誰もが「そうだよね。」と思える、大きな目標に変わっていきます。この大きな目標を、仲間と一緒に見ていきませんか。

職場の「理想の状態」(目指していくところ)は、何でしょうか。ロバートフリッツの緊張図を活用し、考えていきます。

- ① 私達にとって共通の「理想の状態」を書きます。大きな目標をイメージしましょう。(例：子どもに本当に大事な体験をさせてあげたい。)
- ② 現在の状態を客観視して書きます。(例：行事について変えたい人、変えたくない人がいる。変えることを考えると、手順が大変である等)
- ③ 現状から、理想の状態に近づくために、できることはなんなのでしょうか。(例：今までのやり方を今一度見直すための会議の提案。等)

大きな理想の状態を掲げながら話をする中で、ぶつかり合いにはなることはありません。批判し合うことがなくなり、アイディアが次につながっていったります。

相手が受け取りやすい提案にするための伝え方の例です。『【テーマ】の件なのですが、【現在の状態】という現状があると思います。【理想の状態】が園にとって、みんなにとっても良いのではないかと感じています。【そのためにできること】をしてみるの、いかがでしょうか?』というように伝えます。そうすることで、「そうだ、私たちのゴールはここだった。」とみんなで気づくことができるかもしれません。本当はどうしていきたいのかを確認すると、ゴールがみんなの目標となります。

5 最後に

日頃のコミュニケーションを意識していきながら、子どもの思いに耳を傾け、何が大事なのかをもっと語り合える関係性を目指して、明日への一歩を踏み出してみましょう。

第2回 焼津市保育者資質向上研修会(抜粋)
令和6年7月19日(金)
会場：焼津市役所 会議室1B